少年

月島 真昼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
少年

【Ｎコード】
Ｎ３９９２Ｉ

【作者名】
月島　真昼

【あらすじ】
ぼくらは最強だった。リトルリーグだってせいはした。野球が大好きだった。なのに高森は野球を辞めるって言い出した。

ぼくらは最強だった。
リトルリーグだってせいはした。
野球が大好きだった。

なのに高森は野球をやめるって言いだした。

びょう院でお医者さんにやっちゃいけないって言われたみたいだ。
だからやめるんだ　って高森はいった。
いや　だった。だって高森はエースピッチャーで高森がいっぱい
バッターを打ち取るのをぼくは１番近い場所で見ることができる。
それがぼくの野球だったからだ。

ぼくは高森に勝負をいどんだ。

河原でてきとうに小石をはらってまずは高森が打席に入った。
ぼくはこんしんの一投げをはなった。高森はあっさりそれをホー
ムランにした。　ボールはきれいに青空にとんでいった。

ズルい。ぼくがホームランをうっても引き分けだ。もう一度やっ
たらぼくはきっと高森に勝てない。

ぼくがなみだをこらえてるとマネージャーの早川さんがぼくらを
見つけて河原を下ってきた。

なんかたのしそう　あたしともショーブだ。

早川さんは高森に向かってバットをかまえた。高森はあさいため息をはくとゆるくボールを放った。
打った。だけどボテボテでいきおいのないボールは高森の足元で止まった。高森はそれをひろおうともしなかった。早川さんはとてとてはしってざんていファーストの位置で止まる。

これで打ったらツーランだぞ。

高森は低い声でいった。
ぼくは早川の手放したバットをひろって打席に入った。きんちょうでてのひらが湿っていた。

高森が投げた。はじめてバッターボックスからみた高森のボールはめちゃくちゃ速かった。そういえばぼくしか高森の球が捕れないからぼくはレギュラーになれたんだといまさら思い出した。ぼくには守備以外の特技なんてないのだ。

高森が2球目を投げた。
ぼくはがむしゃらにバットを振った。あたらなかった。

負ける。いやだ。負けたくない。もっと高森と野球がしたい。そういえば高森はどんなふうにホームランを打ったっけ？
高森がホームランを打ったかまえをまねしてみる。

高森はちいさく笑って3球目を投げた。速い。もう振らなきゃ。
高森のボールは手元でグンで速くなるらしいから

カキーン！

気持ちのいい音がした。

手元にしびれが走る。バットが後ろに吹っ飛ぶかとおもった。

ホームランだ！

ぼくはガッツポーズをした。高森が近づいてきた。これで高森は野球を続けて……

アウトだ。

高森は短く言ってぼくにふれた。手には早川さんがボテボテのゴロにしたボールがある。

そんなのズルい　ぼくはホームランを打ったじゃないか。

高森につかみかかろうとしてぼくは高森が泣いてるのにきづいた。

ああ高森だってほんとは野球がしたいんだ。大好きなんだ。だけどもうできないんだ。たった3球を投げただけで泣くほど肩がいたいんだ。

きゅうに全部理解できてしまってぼくも泣いた。

早川さんもかけよってきて3人で泣いた。

たくさん、たくさん泣いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3992i/

少年

2010年10月21日21時22分発行